

# 『パンチ』にみる記号としてのファッション ——1918年から1923年のカートゥーンを中心に——

常見 美紀子

Fashion as a Symbol in “Punch”

Mikiko TSUNEMI

## はじめに

諷刺漫画週刊誌『パンチ』が、イギリスで創刊されたのは1841年7月17日（廃刊1992年4月8日号）のことである。今から150年あまり前、ヴィクトリア女王（在位1837～1901年）の即位から4年、産業革命のはじまろうとする時である。『パンチ』は俗称で、正式名は『パンチ、ロンドン・シャリヴァリ(PUNCH, OR THE LONDON CHARIVARI)』である。パリで1832年創刊された日刊紙『シャリヴァリ (CHARIVARI)』の人気が高いのに注目し、ロンドン版シャリヴァリが創刊された<sup>1)</sup>。フランス語の「シャリヴァリ」とは、もともといやがらせのため、鍋釜をたたいて騒ぐ風習を言う。これをパリ在住の画家シャルル・フィルボンが政治を諷刺する日刊紙の名称として用いた。英語の「パンチ」は、本来人形芝居のなかで相手かまわず、殴り倒す悪役の主人公の名前である。この「パンチ」のごとく、『パンチ』は政治や社会に存在する矛盾を遠慮なくとりあげ、笑い、罵倒するというのが当初からの編集方針であった。しかし、創刊当時の過激な笑いは、いくぶん押さえたものとなった。これによって次第に中産階級の人々によって支持され、読まれるようになったのである。創刊の時期がヴィクトリア朝の誕生と同時期であるため、その頃の『パンチ』は19世紀のイギリスの政治・社会を読み解く史料として取り上げられることが多かった<sup>2)</sup>。

本研究では、ヴィクトリア時代でなく、第一次世界大戦（1914～1918年）の終結した1918年から23年までの6年間<sup>3)</sup>を対象とした。この期間に限定した理由は、第一次世界大戦前にはじまるさまざま変化が、大戦後に顕在化したことによる。たとえば、今世紀に入り、女性の風俗や身体観は水面下では変化しつつあったが、社会的現象として立ち現れてくるのは、大戦後であった。一方、政治・経済に関しては、それまでのヨーロッパ列強国の先導という枠組みが崩れ、戦後、優位に立ったアメリカへと世界の指導権が移行するという劇的な変化がおきた時期でもある。この時期のイギリス社会の変化は『パンチ』ではどのように描かれたのだろうか。本研究では、政治・社会を対象とする諷刺画「カートゥーン」に描かれた図像資料に限定し、カートゥーンに描かれた衣装の検証を行う。

---

服飾美術学科 ファッションデザイン研究室

表1 第一次世界大戦関連年表

1916	ロイド・ジョージ挙国一致内閣成立	1920.1	国際連盟成立
1917	王室名ウィンザー家と改称	1920.6	トリアノン条約(対ハンガリー)
1918	議会改革法	1920.8	セープル条約(対トルコ)
1918.1.8	ウィルソン大統領(米国)の14カ条発表	1921.11	ワシントン会議
1918.11.11	第一次世界大戦終結	1922	エジプト独立を承認
1919.1	パリ講和会議	1922	アイルランド自由国成立
1919.6	ヴェルサイユ条約(対ドイツ)	1923	トルコ共和国成立
1919.9	サンジェルマン条約(対オーストリア)	1923.7	ローザンヌ条約(対トルコ)
1919.11	ヌイイ条約(対ブルガリア)		

## 1. カートゥーン (cartoon) とは

1843年7月以降の『パンチ』は、「カートゥーン」と呼ばれる1ページ大の諷刺画で評判をとり、諷刺漫画雑誌としての性格をいっそう強めていった<sup>4)</sup>。カートゥーンは、もともとは壁画などの下絵を意味していたのだが、『パンチ』によって時事諷刺漫画、通例「一コマ漫画」の意味で用いられるようになった。この意味でもカートゥーンこそ、『パンチ』の顔であった。

大戦中もカートゥーン・シリーズは健在であった。1918年から1923年までのすべてにカートゥーンは1冊に2枚は必ず掲載され、巻末には挿絵画家の名前とカートゥーンのタイトルが明記されている<sup>5)</sup>。1ページ大のカートゥーンは、主として政治・社会の諸現象を諷刺している。第一次世界大戦中から戦後にかけてのカートゥーンには、戦後処理をめぐるヨーロッパ諸国の政治的駆け引きをテーマとする諷刺画が多く掲載されているのが特徴である。さらに1920年の「国際連盟」の成立に関する各国の思惑もからみ、国際情勢は複雑な様相を呈していた。これも『パンチ』にとっては願ってもない格好の諷刺材料となった[表1]。敵国であった同盟国ドイツ、オーストリア・ハンガリー帝国、トルコ、ブルガリアに対してはとりわけ手厳しく辛辣な諷刺が、反して連合諸国フランス、イタリア、ロシア、セルビア、ルーマニア、ベルギー、ギリシアにはきわめて友好的な諷刺という対比がみられた。

この時期のカートゥーンは、次の3つのテーマ、「首相ロイド・ジョージと舞台装置としての衣装」、「ウィストン・チャーチルの被り物」、「国家の象徴としての衣装」に分類できた。以下、テーマ別にみていこう。

## 2. 首相ロイド・ジョージと舞台装置としての衣装

この時期、もっとも多い登場人物は、時のイギリス首相ロイド・ジョージ (Lloyd George 1863~1945<sup>6)</sup>) であった。戦中の1916年から戦後1922年まで首相を勤めたロイド・ジョージは、



図1 ロイド・ジョージと「議会の母」



図2 聖ディビットに扮すロイド・ジョージ

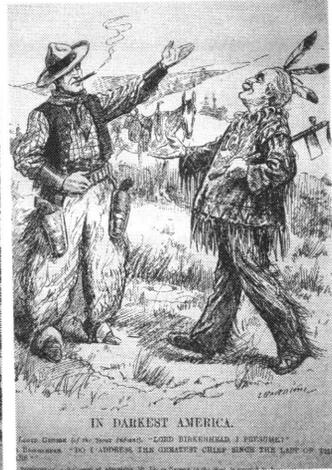


図3 スー族に扮するロイド・ジョージ

研究対象の期間とほぼ重なっている。戦中は戦略、戦後は戦後処理問題、植民地の独立問題、国際連盟の設立など、複雑な国際関係のなかでの首相在任であった。彼は、舞台の主人公さながら、諷刺の対象となる時・場合にに応じてさまざまな衣装一民族服・歴史服（古代ギリシア・古代ローマ・ゴシック）などを自在に纏い、演じていく。「召し使い問題<sup>7)</sup>」では、ダビデことロイド・ジョージが、議会の象徴である「かつら」を被った「議会の母（MATHER OF PARLIAMENTS）」からの要求で、議員の議会での勤務について善処する。このときのロイド・ジョージは、燕尾服に黒とグレーの縞ズボンに蝶ネクタイという当時の中産階級のジェントルマン・スタイルに身を固めている [図1]。

「この安心に感謝<sup>8)</sup>」では、聖ディビット（ウェールズの守護聖人）に扮するロイド・ジョージは、ビザンチン風の刺繍あるいは模様織りのついた古代衣装に、ローマのトーガをおもわせる半円形のマントを着用、足にはサンダルを履き、聖パトリック<sup>9)</sup>の仕事を手助けして、蛇使いとして大蛇（疑惑）を取り去ろうとしている [図2]。イギリスの中産階級の人達にとって周知の聖書の一場面を引用しての政治諷刺である。

「未開のアメリカにて<sup>10)</sup>」のシーンでは、ロイド・ジョージは、頭を羽で飾り、スエード風の味をもつ鹿皮の衣料にフリンジの装飾を施した北米インディアン、スー族の民族服を着用している [図3]。頭飾りは、鷲の羽で、スー族にとって斑点のある鷲はあらゆる生命の本質を表す。ワシの羽は太陽光線とみなされ、鷲の羽の頭飾りは雷神鳥（サンダーバード）、宇宙霊の象徴である。戦いの前にこの羽飾りをかぶることで、戦士は鷲の神の力と強さを自らのものとした<sup>11)</sup>。ロイド・ジョージは、スー族の扮装で、その鷲の強さと力を得ようとしたともとれる一場面である。

このように名優ロイド・ジョージは、ある時は聖人に、あるときはインディアン、またあるときはアーサー王物語りで有名な円卓の騎士<sup>12)</sup>にと、変幻自在にその時代、その地域の衣装



図4 チャーチルと小さい被り物



図5 エジプト海路上のチャーチル



図6 大英帝国会議前のチャーチル

を纏う。

シェクスピアの時代より英国人の演劇好きは有名だが、カートゥーンの中には周知の演劇の一シーン<sup>13)</sup>をあらかじめ想定し、描いている場合もある。「カートゥーンというメディア」は、「舞台というメディア」の引用によって成立しているといえよう。

『パンチ』は英国人にとっても正確に読み解くことが難しいといわれている。古典や聖書、演劇など幅広い教養に加えて、時事問題にも精通していなければ、諷刺の真の意味を読み解くことはできないようだ。

### 3. ウィストン・チャーチルの被り物

ウィストン・チャーチル (Winston Churchill 1874~1965<sup>14)</sup>) は、われわれ日本人にも有名な英国政治家だが、彼の「被り物」は、『パンチ』で、絶好の諷刺の対象となった。チャーチルは、第一次世界大戦中の海相時代、ダーダネルス海峡の敗北の責任をとって辞職したという経歴の持ち主である。彼は、並外れた大きい頭という身体的特徴と敗北による失脚によって、格好の諷刺のターゲットとしてしばしば取りあげられた。しかし、政治家にとって、カートゥーンに単独でとりあげられるということは大変な名誉であった。自由党のG・J・ゴージェンという政治家は、1881年11月にラグビー校を訪れたとき得意げに「私は政治家としてこの上ない最高の望みをかなえた一つまり、『パンチ』にまるまる一人だけのカートゥーンを描かれる身分になったのですから！」と宣言したという<sup>15)</sup>。その意味では、たとえ辛辣な諷刺の対象であったとしても、政治家チャーチルにとって不利とばかりはいえないようだ。むしろ、売名に一役かったのかもしれない。

「私を助けてくれた帽子<sup>16)</sup>」では、さまざまな帽子を試着しているチャーチルは、「よく似合っているが、いつものように少し小さい」とつぶやいている〔図4〕。頭の大きさに比べて

いかにも帽子が小さいことを挿絵で誇張して表現するという、視覚に訴えた諷刺で、押さえたユーモアをかもしだしている。これはその後のウィットとユーモアに溢れる「小さい被り物のチャーチル」の諷刺の伏線となる重要なカートゥーンである。

「地と空の神<sup>17)</sup>」のシーンでは、チャーチルをして、エジプト行き海路の甲板上で「不運にも海はいまのところ私のコントロール下でない」と語らせ、ダーダネルス海峡の敗北を暗示し、諷刺している。小さい帽子を海風で飛ばないように右手でつかみ、甲板で転がらないように左手は必死で船縁を握り締め、体をくの字にまげて耐えているチャーチルの姿に滑稽さが滲み出ている。ここでも小さい帽子と頭とのアンバランスが、押さえた英国流ユーモアを醸し出している〔図5〕。

「我々帝国のNO.1<sup>18)</sup>」では、ポロ競技中のチャーチルが馬上からボール（地球）を力づくで打とうとする姿を描き出している。チャーチルが、開催される大英帝国会議において強力な指導力を発揮し、地球上に散在する植民地の統率が強要されている諷刺画である〔図6〕。権力の行使という立場に追い込まれたチャーチルに、頭部を十分に覆うことのできない小さいサイズのヘルメットを被せることで、誌面に漂う緊張感を和らげ、笑いを誘い出している。

「軍備縮小と人<sup>19)</sup>」では、背景にネルソン（Horatio Nelson 1758～1805<sup>20)</sup>）とナポレオンの肖像画を配し、チャーチルの置かれた状況（最近の戦時下の陸海軍の大臣）をビジュアルに示している。ここではネルソンに海軍を、ナポレオンに陸軍を代表させている。チャーチルはナポレオンの右手を左脇に突っ込む有名なポーズを真似、頭にはナポレオン帽（フェルトでできた二角帽）を被っている。これはチャーチルの一連の被り物への諷刺とは異なり、ジャスト・サイズの帽子がつかわれている。

「チャーチルと友達<sup>21)</sup>」のシーンで、チャーチルは「われわれは二人とも歴史を作った。そしてふたりとも戦争を本に著した。われわれは被り物を交換しよう」とシーザーの胸像に話しかける。シーザーの頭にはローレル（月桂冠）が被されている。古代ギリシアでは不死と勝利の象徴の月桂冠をアポロン神の霊木とし、その枝葉を輪として冠とし、競技の優勝者などに被らせて称賛の意をあらわしたという。転じて、最も名誉ある地位をあらわすようになった。その名誉な月桂冠と交換しようとする帽子は、やはり小さな帽子である。チャーチルのうぬぼれを、視覚に訴える辛口の諷刺で、滑稽さを演出している。

「小さい被り物のチャーチル」にみられる、一連の視覚に訴えるユーモア溢れる政治諷刺から、いかに『パンチ』が中産階級の共感を得ようと巧みな誌面づくりに力をそそいでいたか見てとれる。

#### 4. 国家の象徴としての衣装

『パンチ』のカートゥーンのなかで、各国がどのような人や動物で象徴され、どのような衣装で表現されていたのか見ていこう。



図7 アンクル・サムとジョン・ブル



図8 ブリタニアとウィルソン大統領



図9 ブリティッシュ・ライオンとアメリカン・イーグル

### (1) イギリス

イギリスを象徴している「ジョン・ブル JOHN BULL」とはイギリス国民のあだ名で、『パンチ』では太鼓腹で栄養のいきとどいた少し太りぎみの英国紳士として描かれる。「パリ・モデル<sup>22)</sup>」のジョン・ブルは、中産階級のもっともポピュラーな服装である頭にはシルクハット、蝶ネクタイ、燕尾服、懐中時計といういわゆるジェントルマン・スタイルである。「選手権試合<sup>23)</sup>」では、ジョン・ブルは、全身に当時の人気スポーツのポロ、テニス、ゴルフの道具を身につけ、英国国民の愛好する馬の背に乗るという心憎い場面設定である。1コマ漫画特有のひとつひとつの「もの」を象徴的に扱ったカートゥーンである。「4回目の7月<sup>24)</sup>」には、第一次世界大戦も長期化し、すでに4回目の7月を迎え、終わりそうにない戦争に業を煮やしているジョン・ブル（イギリス右）とアンクル・サム（アメリカ左）が軍服姿で登場する。1776年のアメリカの独立宣言から1918年までのパートナーシップの絆の深さをお互いが相手国の国旗をもつことで表現している〔図7〕。

「ブリタニア Britannia」は、大英帝国とブリタニア(大ブリテン島の古代ローマ名)を象徴する女性である。彼女は、古代ローマ時代の羽つき兜にキルトつき軽装の銅鎧を着装、その上から大英帝国の国旗をまきつけていることが多い。「辛口のユーモア<sup>25)</sup>」では、アメリカ大統領ウィルソンに、タイトルのごとく辛口のユーモアを浴びせているブリタニアである〔図8〕。

本来、イギリスのシンボルとしてのジョン・ブルやブリタニアはイギリス諷刺画の伝統であった。しかし『パンチ』初期の挿絵画家ジョン・テニエルによってジョン・ブルはヴィクトリア朝風に洗練され、現在にみるジョン・ブル像が誕生し、イギリス社会に定着した<sup>26)</sup>。

動物による表現として、大英帝国の紋章である「ブリティッシュ・ライオン」が英国のシンボルとして登場する。「友愛の杯<sup>27)</sup>」では、ブリティッシュ・ライオンがアメリカン・イーグルに友愛の記念として杯を贈っている。それに対して、アメリカン・イーグルは、右手を胸に

あて最高の礼でありがたく押しいただく [図9]。戦後、次第に世界の指導権がアメリカに移行していくが、この時点ではまだ、イギリスがアメリカに対して優位に立っていたことを示している。「脅した平和攻勢<sup>28)</sup>」では、ジャーマン・イーグルが、手傷をおっているにもかかわらず、虚勢を張ってブリティッシュ・ライオンに反撃している。鋭い嘴で威嚇するジャーマン・イーグルと牙を剥き出すブリティッシュ・ライオンのいがみ合いのなかに、先頭をきってドイツに宣戦布告をした英国のドイツ観が表わされている。

## (2) アメリカ

イギリスのジョン・ブルに対して、アメリカ政府または同国民の象徴は「アンクル・サム UNCLE SAM」である。その由来は、アメリカの「UNITED STATE」の頭文字 U. S. の略称に人の名前を当てはめたとされ、「アンクル」は、頼りになる人と言う意味が込められている。ジョン・ブルは少し太りぎみの英国紳士であるのに対して、アンクル・サムは独特のソフトハット（中折れ帽）をかぶり、あごひげを蓄え、痩せぎすの人物として描かれる [図7]。アメリカをシンボライズする動物は、米国の国章に使われている鷲（ハクトウワシ）で力と強さを象徴している。『パンチ』ではオーストリアとドイツと区別して、「アメリカン・イーグル」と呼んでいる。

## (3) フランス

フランスのシンボルは、「マダム・フランス、あるいはマドモワゼル・フランス」と呼ばれる女性である。「彼の新しい空想<sup>29)</sup>」では、敵国トルコとジョン・ブル、マダム・フランスが登場し、戦後の新しい外交を模索している様子が表現されている。ジョン・ブルは19世紀のジェントルマン・スタイル、フランスは、ボディスを着用した民族衣装のスタイルに、木靴を履いて登場する。帽子にはリボンを円形に畳んだ飾りがつけられる。時には、肩紐のない胸で留めるフランスの代表的なエプロン・スタイルで、胸にはフランスの略語の F・R が描かれている。トルコの男性は、民族服のシャルワールではなく、トルコの近代化を視覚化した西洋男子服を着て登場している。ケマルパシャによるトルコの「近代化」という抽象的事象を、近代的衣装という図像を使うことでビジュアルに読者に訴えかけている [図10]。カートゥーンには流行服は極端に少ないのだが、すべての戦後処理の終わったあとに「野心家のトーナメント<sup>30)</sup>」では、マドモワゼル・フランスは、ミス・ブリタニアとともに頭には流行のターバンを巻き、最新流行のテニス・ウェアを着て、テニスに興じる [図11]。平和のイメージを、流行服という図像に置き換え、発信している心憎い演出だといえよう。これ以前のカートゥーンには流行服はいっさい採用されていない。1923年のローザンヌ条約（対トルコ）によって戦後処理も一段落し、真の意味で戦後になった時に、最新モードがカートゥーンに登場した。この23年は戦後の節目の年ということができるであろう。



図10 ジョン・ブル, トルコ, マダム・フランス



図11 ミス・ブリクニアとマドモワゼル・フランス



図12 ドイツのバッグマン

#### (4) オーストリア

オーストリアのシンボルは「双頭の鷲」である。双頭の鷲は、ビザンチン起源のもので、神聖ローマ・オーストリア・ロシアの三皇帝の紋章であった。「再考中<sup>31)</sup>」では、鷲の二つの頭にはオーストリア皇帝冠を被り、その政治的権威を誇示している。この大戦終結の直前のカートゥーンは、オーストリア・ハンガリー帝国崩壊寸前の様子を、双頭の鷲で描き出している。

オーストリアはチロリアン・ハット（チロル地方で用いられる茶色または緑色のフェルト帽子で、ブリムが狭くクラウンに飾り紐や羽毛がついている）を被った男性でシンボライズされることもある<sup>32)</sup>。

#### (5) ドイツ

『パンチ』では、ドイツのシンボルは、すこし太りぎみで太鼓腹のどこか狡猾そうな男性として描かれている。当然、かつての宿敵ドイツに対して、『パンチ』は容赦のないパンチを浴びせる。1945年までに『パンチ』は6冊の別冊を刊行したが、その4冊は1914年に集中し、そのうちのひとつがドイツを描いた『『パンチ』と暴漢プロイセン』で、徹底的に辛口の諷刺でドイツをたたきめしている。「新しいドイツの攻撃<sup>33)</sup>」では、ドイツ人の出張販売員（バッグマン—英国の俗語で、出張販売員、米語でゆすりやの手先を意味する）が、「もうドイツは軍事国ではなく、商品サンプルこそが新しい兵器である」と英国を訪問する〔図12〕。

「困っている友人たち<sup>34)</sup>」の場合は、かつての同盟国同士の典型的な民族衣装を纏ったトルコ人と、穴のあいた衣服を纏った貧しいドイツ人が登場する。1921年4月ドイツは天文学的な負債を背負ったところであったから、そのような貧しい衣服表現となったのだろう〔図13〕。動物のシンボルでは、アメリカ、オーストリアと同様に鷲であらわされるが、区別して特に

「ジャーマン・イーグル」と呼称している。

#### (6) トルコ

敵国トルコも、ドイツ同様に1914年の『パンチ』別冊で、「とても怖い七面鳥 (TURKY)」として辛辣な諷刺画が描かれている。トルコ人は、頭には「フェズ (Fez)」と呼ばれるトルコ帽をかぶった男性で象徴される。この帽子はケマルパシャによる1923年共和国成立まで民族衣装の一部で、トルコの典型的象徴であった。フェズは円筒状の普通赤色のフェルト製で、黒あるいはすんだ空色の房がついている。1923年以降はこの帽子は禁止された。下衣には、民族服の「シャルワール」というスカートのようなゆったりとしたズボンを着用する。しばしば喫煙スタイルで登場、口には、葉巻、紙タバコ、水タバコと多様である。足には、先がとがり黒の玉房や刺繍を施したスリッパ形式の履物「バブーシュ」を履いている [図13]。七面鳥にトルコ帽を被せ、トルコを象徴する場合もある。

トルコは、自墮落で横柄な態度、喫煙、近代的衣装と異なるルーズなシルエットの民族衣装を着用した人物として敵視して描かれている。それは、同じ敵国ドイツに対する辛辣な諷刺とも異なる、サイドの指摘した西欧社会からみた「オリエント」が色濃く反映している。彼のいう「オリエント」とは、西欧から外れた周辺の地を意味し、どこか西欧より下にみる思想のことである。

#### (7) その他の国々

他の国々も、一般的には民族衣装によって象徴されているということが出来る。ギリシアは「ティノ (TINO)」と呼ばれる男性に象徴され、民族衣装を着用して登場する。ギリシアはオスマントルコと隣接しているゆえに諍いも多く、トルコとの争いを描いたカートゥーンが数枚ある。

1917年の革命後のソヴィエトは、ヴォルシェビキが活躍、彼は「ルパシカ」という民族服にブーツといういで立ちである。熊によって象徴される時もあり、足にはヴォルシェビキと同様ブーツを履いて、擬人化されている。ベルギーの象徴は民族衣装を着用した女性である。中国は、チャイナ服を纏った男性が、頭に急須の形をした帽子をかぶり登場する。インドは、民族衣装のサリーを装った女性でシンボライズされ、動物の象徴はベンガル・タイガーであった。

日本に関連するカートゥーンはたいへん少なく、2枚だけであった。昭和天皇の皇太子時代の英国訪問の場面では、皇太子は軍の礼服に身を包み、ジェントルマン・スタイルのジョン・ブルに暖かな歓迎を受けている<sup>35)</sup>。「東と西はひとつ<sup>36)</sup>」のシーンでは、1923年関東大震災で焼け野原になった場で悲観にくれる着物姿の女性を、英国の象徴ブリタニアが勇壮な戦いの鎧姿で力づけなぐさめている。



図13 トルコとドイツ



図14 ブリタニアと「平和」



図15 「平和」と「国際連盟」

### (8) 理念の表現

「理想や理念」という抽象的事象は、ギリシア神話やギリシア時代の人物を使って象徴されている。「平和 (PEACE)」の象徴は、古代ギリシアの衣装を身に纏う女性の天使として「勝利<sup>38)</sup>」で描かれている [図14]。この第一次世界大戦の勝利を祝う格調高いカートゥーンでは、連合諸国の紋章が周辺に描かれ、その中を中世の立体的な甲冑に身を包んだブリタニアと「平和」の象徴が、凱旋する様子が表現されている。

「国際連盟 (LEAGUE OF NATIONS)」の象徴も、やはり「世界の希望<sup>39)</sup>」では、ギリシア風衣装を着用している [図15]。国際連盟はアメリカのウィルソン大統領が提案し、1920年1月に正式に成立した。「道徳的勧告<sup>40)</sup>」の場合は、「国際連盟」はか弱いウサギに象徴され、国際紛争の象徴である大蛇と対峙させている。

「議会」の象徴は、先のロイド・ジョージのところすでに紹介した。「平和の庭<sup>41)</sup>」の場面では、「議会の母」を議会のシンボル「かつら」をかぶった年配女性で象徴している。これは、かつて議会ではかつらをかぶる風習があったことに起因している。

## 5. 記号としてのファッション

『パンチ』のカートゥーンでは、政治諷刺のために歴史服・民族服・流行服という三種類の多様で豊かな衣服が、時と場合に応じて自在に描かれていた。

「歴史服」は、特に「ロイド・ジョーと舞台装置としての衣装」でみたように、聖書や神話の、時代を明確に表す場合に意識して用いられた。「理念や理想」も、古代ギリシア・古代ローマという西洋文化の源とされる時代の衣服が採用されていた。

「民族服」は、国をシンボライズする手段として使われ、他国との差別化を図っている。各国の象徴に使われた民族服は、ブリュノ・ロゼルが『20世紀のモード史』のなかで述べている

ように、1900年頃から次第に世界から姿を消しつつあった。特に、二つの大戦の間で、パリ・モードが流行のシステムを整え世界を制覇していくにつれて、民族服は加速して消滅していった<sup>37)</sup>。しかしながら、第一次世界大戦直後には民族服はまだ健在であったため、『パンチ』に描かれたように国を象徴することが可能であったといえるだろう。

カートゥーンでは、最新モードは非常にまれで、先にあげたテニスウェアが唯一の例であった。

チャーチルの諷刺や国のシンボルで使われた「帽子」や「被り物」は、現在ではすっかり陰を潜めてしまった。当時の諷刺画では階級・地位・国籍をあわらす格好のシンボルとして描かれていたことは特筆すべきことである。

「写真」は瞬時に外界を正確に写すがゆえに、時代の証人となる。それに反して諷刺画は、挿絵画家と読者の双方の共通認識のうえに成立する図像のみが採用される。その図像は、何らかのメッセージを発する記号（シンボル）として機能する。カートゥーンには、読者にとって周知の衣装、つまり過去に着用された「歴史服」、長年各々の民族が作り上げた「民族服」などが描かれた。これらの衣服は、おのずと何らかのメッセージを発しているゆえに「記号」として機能するといえる。

衣服の詳細な表現は、おそらく民族服・歴史服の豊富な資料をもとに描いたと思われる。衣服の的確な表現によって生まれるリアリティこそ、国政や社会、服装の流行にいたる時事問題を、痛烈に諷刺し、読者をより現実味ある面白さやユーモアに誘い込こんでいく装置なのである。

読者は、民族服や歴史服という「記号としてのファッション」の、時代・場を読み解くことで、辛辣な諷刺を真に理解することができたといえる。

## おわりに

『パンチ』という150年に渡って刊行された諷刺週刊漫画は、ヴィクトリア時代以来のイギリスの社会、文化を鏡のように映し出していた。今回は、カートゥーンに描かれた衣服に限定して研究した。しかしながら、政治以外の風俗・習慣に関する諷刺、たとえばダンスの風俗、女中の意識の変化など、イギリス中産階級特有の興味深い内容も確認できた。

今後は、それらの風俗の変化に関して、衣服を媒体にしながら、さらに研究を進めたい。

## 註・引用文献

- 1) 松村昌家：パンチ素描集—19世紀のロンドン—。東京、岩波書店、1994、P244—245.
- 2) 小池滋編：ヴィクトリアンパンチ7 1841—1901。東京、柏書房、1996、P.3.
- 3) 312冊 52冊(年間)×6年を対象に項目毎に調査した。(1冊のページ数は約20ページである.)
- 4) 前掲 1) P.5—6.

- 5) カートゥーンの総数 1918年105, 19年106, 20年104, 21年104, 22年106, 23年104  
総合計629
- 6) ロイド・ジョージ Lloyd George (1863—1945) 政治家. 自由党员. 1905—8年商相. 1908—15歳相. 1915年軍需相. 1916年陸相. 1916年12月15日—1922年首相. ベルサイユ条約 (1919年) 起草者の一人.
- 7) THE SERVANT PROBLEM (第157巻 430頁 1920・11・25)
- 8) FOR THIS RELIEF MUCH THANKS (第161巻 470頁 1921・12・14)
- 9) キリスト教の伝導者, アイルランドの守護神
- 10) IN DARKEST AMERICA (第165巻 1923・10・10)
- 11) ミランダ・ブルース・ミットフォード, 若桑みどり訳: サイン・シンボル事典. 東京, 三省堂, 1997, P.66.
- 12) NAUGHT DOING (第161巻 303頁 1921・10・19)
- 13) 第161巻 303頁1921・10・19 第157巻 510頁 1919・12・17 挿絵の右下に「Patience, Act I (忍耐, 1幕)」とある.
- 14) ウインストン・チャーチル, Winston Churchill 1874—1965 政治家. はじめ記者. 1900年下院議員. 1906年保守党から自由党に転ずる. 商相, 法相など歴任し, 11年海相, ダーダネルス海峡の失敗で辞職. その後, 海需大臣. 24年保守党に転じ, 歳相. 第二次世界大戦の戦時内閣首相.
- 15) 前掲 1) P.257.
- 16) HATS THAT HAVE HELPED ME (第160巻 63頁 1921・1・26)
- 17) THE LORD OF EARTH AND AIR (第160巻 191頁 1921・3・9)
- 18) OUR IMPERIAL NO. 1 (第160巻 463頁 1921・6・15)
- 19) DISARMAMENT AND THE MAN (第161巻 263頁 1921・10・5)
- 20) ネルソンはイギリス提督で1793年以降フランス軍と各地に転戦して右目, 右腕を失い, 1798年ナイル河口アブキール湾でフランス艦隊を撃滅, 1805年フランススペイン連合艦隊をトラファガー沖に撃滅し, その際戦死した. 出典 新村出: 広辞苑第4版. 東京, 岩波書店, 1993, P.1997.
- 21) MR.CHURCHILL AND FRIEND (第164巻 147頁 1923・2・14)
- 22) THE PARIS MODEL (第157巻 403頁 1919・11・12)
- 23) THE CHAMPIONSHIP LISTS (第160巻 403頁 1921・5・25)
- 24) THE FORTH OF JULY (第155巻 3頁 1918・7・3)
- 25) “DRY” HUMOUR (第156巻 123頁 1919・2・12)
- 26) 前掲 2) P.69.
- 27) THE LOVING CUP:A PARTING TOAST (第156巻 403頁 1919・5・21)

- 28) THE THREATENED PEACE OFFENSIVE (第154巻 1918・5・15)
- 29) HER NEW FANCY (第161巻 443頁 1921・12・7)
- 30) A TOURNAMENT OF FLIERS (第165巻 12頁 1923・7・4)
- 31) THE MELTING—POT (第155巻 295頁 1918・11・6)
- 32) THE PEACE QUEUE (第156巻 394頁 1919・5・21)
- 33) THE NEW GERMAN OFFENSIVE (第157巻 1919・9・10)
- 34) FRIENDS IN NEED (第164巻 157頁 1923・2・14)
- 35) A ROUGH ISLAND WELCOME (第160巻 370頁 1921・5・11)
- 36) WFERE EAST AND WEST ARE ONE (第165巻 1923・9・12)
- 37) ブリュノ・デュ・ロゼル著, 西村愛子訳: 20世紀モード史. 東京, 平凡社, 1995, P.27.
- 38) VICTORY! (第155巻 1918・11・20)
- 39) THE HOPE OF THE WORLD (第158巻 271頁 1920・4・7)
- 40) MORAL SUASION (第159巻 71頁 1920・7・28)
- 41) THE GARDEN OF PEACE (第157巻 50頁 1919・7・9)

#### 参考文献

- 1) A・J・テイラー著, 倉田稔訳: 目で見る戦史『第一次世界大戦』. 東京, 新評論、1980.
- 2) アンドルー・セイント, ジリアン・ダーリー著, 大出健訳: 図説ロンドン年代記(下). 東京, 原書房, 1997.
- 3) R・ターナー・ウィルコックス著, 石山彰訳: モードの歴史. 東京, 文化出版局, 1979.
- 4) Max Tilke “Costumes Folkloriques” 1978, Office du Livre, Fribourg Editions Vilo, Paris
- 5) 田中千代: 服飾事典. 東京, 同文書店, 1969